

B-1-35 LP Achiva を用いたナースコール連動システムの使用経験について

聖隸浜松病院 臨床工学室
原 季実子 西條 幸志 北本 憲永

はじめに

一般病棟において個室が増加する中、特に在宅人工呼吸器患者は個室を希望することが多い。しかし、人工呼吸器の警報を看護スタッフが確実に聴取することは困難なのが現状である。今回、人工呼吸器警報の早期発見、早期対処に成人用在宅人工呼吸器として使用しているタイコヘルスケアジャパン社製（以下タイコ）LP Achiva（以下アチーバ）に付属している、ナースコール連動システムを利用し院内および在宅で実践したので報告する。

方法

当院ナースコールはケアコム社製 BSP-80A であり、スイッチを押すことで病棟内 PHS と連動する。アチーバは本体後面に警報信号の専用出力口があり、警報発生時に信号が出力される。連動する専用コードは、ナースコールシステムが各病院で異なることからタイコでは販売しておらず、作成も行ってもらえなかった。そのためステレオピンジャックの 2 ピンを用いて作成したが、アラームの有無に関わらずナースコールが鳴り続けた。原因是アチーバの出力ラインに微弱電流が流れているためであった。そのため一つのピンをアースに落とし改良をくわえたことでシステムは機能した。専用コードには、手押し式ナースコールスイッチ、プレスコールも併用できるよう端子を設けた。

在宅での連動システムには住宅用通報装置（松下電器社製品ワイヤレスコール発信機 ECE1701P、卓上受信機 ECE1601P）を使用した。連動には専用コードが利用できるよう、ケ

アコムに依頼し、受信機の接続端子を加工した。

結果

院内では、スタッフが少ない夜間帯や離れた場所にいる時でも警報発生時、病棟内 PHS により部屋番号が表示され敏速な対応ができるので安心して看護できると評価を受けた。しかし、意図的に発生するアラームには、専用コードをはずす場合も発生した。

在宅では、介護者が少し離れた場所にいるときや、睡眠中でも安心して介護できると評価を受けた。

考察

システムの問題として、ナースコールが頻発する為、専用コードをはずしたり、日中は使用しないことがある。対策として適切なアラーム設定、接続忘れ防止のためシステム利用者への教育が重要である。

また、連動システム不良の可能性もあるため、人工呼吸器とは独立した生体情報（SpO2、CO2 など）モニタは必要不可欠である。そのため当院では必ず在宅人工呼吸療法患者には SpO2 モニタを使用していただいている。

まとめ

連動システムは容易に接続が可能であり、患者と介護する側の安全性は向上する。今後は人工呼吸器だけでなく、生体情報モニタのアラーム連動も考慮に入れ、各分野のメーカーの協力のもと、システム開発と供給を推奨していく必要がある。